

コラム

中国出張を通じて

計量分析ユニット 需要分析・予測グループ 加古正幸

昨年 11 月に、中国へ出張する機会をいただいた。9 月に起きた尖閣諸島沖での海上保安庁巡視船と中国漁船の衝突事件を受けて、中国内陸部を中心に反日デモなども起きていた時期であった。普段は社会情勢に強い関心を示さない妻からも「こんな時期に大丈夫？」と聞かれるくらい連日の報道がなされており、正直、私自身も中国に対して良いイメージは持っていなかった。

今回の出張では、中国での家電機器など民生部門における省エネルギーに対する取組みに関するヒアリング調査などを目的に、北京と、中国国内で相対的に省エネルギーに関する取組みが進んでいるとされる山東省を訪問。ここでは、コラムということから、出張の本来の趣旨とは別の部分で、今回の中国訪問の中で個人的に感じたことを記載したい。

一点目はやはり、現在進行形の高成長を実感できたこと。これまでの人生の半分以上を「失われた 20 年」の中で過ごしてきた私にとって、現地の人々の活気と、今後の成長を確信し努力している姿は、日本では滅多にお目にかかれないものだった。また、現地の担当者などへのヒアリングの際にも、先方からも多く質問事項が出るなど、日本から何か学べることはないかという勉強熱心な印象を強く受けた。テレビなどで、日本のアニメキャラクターのニセモノが中国の遊園地のキャラクターとして紹介されていたのを見たことがあるが、ひょっとしたらそれも勉強熱心さが誤った方向に出てしまったのかもしれないと思ってしまうほど。また、ヒトだけでなく、モノの面からも、既に大型高層ビルが立ち並んでいる北京市内でさえ、あちらこちらの建物の上に建設用クレーンなどが見られ、今まさに成長しているということが実感できた。



[写真]

宿泊したホテルから撮影した北京市内の様子。大規模な建物が立ち並ぶ中で、建設用クレーンも見られ、多くの建物の建設が進んでいることが窺えた。

二点目は、一点目と対を成すが、高成長に追い付いていないものが散見されたこと。特に感じたのが、自動車台数の増加などに伴って発生する各種の交通問題。交通インフラが

整備されていないため、交通渋滞が慢性化しているという報道をよく見かけるが、個人的には、利用者の意識の問題が大きく関係しているように思えた。自動車の急速な普及に伴う免許を取って間もないドライバーが多いことも関係しているかもしれないが、歩行者の交通マナー違反も散見されたことから、それだけではないのだろう。現地での移動中にも交通事故を何件か目撃したが、無理な割り込み・車線変更に起因するものが多く、道路などのインフラが出来上がったところで解消するものではないように思う。私も 10 年以上自動車の運転経験があるが、北京を無事故で運転できる自信は持てなかった。

高成長に関連して二点記載したが、今回色々と感じたところには、「人」が共通項として関係していると改めて感じた。中国の高成長を支えているものの一つに、現地の方々のエネルギーがあることは間違いない。一方で、今回の出張では、(そもそも法規制自体が大きく異なるのは当然として、) 日本との文化・風土の違いも多く感じる事ができた。例えば、日本の民生部門の省エネ政策の代表格であるトップランナー制度では、家電機器などの性能はメーカーの自主計測に基づく性能表示がなされている。対照的に中国では、関係する機関の認証や試験を受けた上での性能表示が必要な上、監査当局による抜き打ち検査なども行われるとのこと。この例は、どちらかという日本が特殊で、企業がコンプライアンスを重視するなどの背景があるのかもしれないが、やはりいわゆる「お国柄」による考え方の違いは存在するのではないか。

大学時代の講義で、米国の政治学者サミュエル・P・ハンティントン (1927-2008) の「文明の衝突」論というものを聞いたことがある。端的に言うと、冷戦後の世界では、文明と文明が接する境界において紛争が激化しやすい(例えば西欧文明とイスラム文明の境界で「衝突」が起こりやすい) というもの。当時は、冷戦終結後にも NATO の存在意義を維持したかったための考え方と認識していたが、調べてみると、おまけ程度の扱いではあるが、中華文明と日本文明(中華文明から派生して成立した日本一国のみで成立する文明圏らしい...) は別の文明圏とされている様子。個人的には「文明の衝突」論には疑問を持つところも多いが、異なる文化が接するときには摩擦が起こるのは当然で、ハンティントンの言う紛争とはレベルが違うとは思いますが、最近の日中関係のこじれもここに関係しているのかもしれない。

今後の日本にとって、中国市場は無視できないものとして紹介されているが、前提としての国民性の違いを認識した上で、協力や切磋琢磨をしていくことが重要だと思う。その根本となるのは、やはり人的なレベルでの相互理解であり、一部報道などでなされてしまっているような偏見などを持つことなく、「良い意味で」違いを認識していくことであると思う。今回の出張で、少なくとも個人的には、現地に対応していただいた方々の(能力の高さはもちろんのことだが) 勤勉さ、前向きさなどを目の当たりにし、改めてそう考え直す事ができた(少なくとも出張前に抱いていた良くないイメージは払拭できた) ことだけでも大きな収穫となったと思っている。

以上